

第2講 デジタルアーカイブプロセス

2000年代における第1次のデジタルアーカイブブームの現在の状況を見て、第1次のデジタルアーカイブブーム（以下、デジタルアーカイブ1.0と呼ぶ。）のプロセスから何が問題で、今後何をどのように改善することが持続可能なデジタルアーカイブ（以下、デジタルアーカイブ2.0と呼ぶ。）を開発するために必要であるかについて考える。

【学習到達目標】

- 「Wonder 沖縄」におけるWeb用コンテンツがなぜ消滅したかについて説明できる。

1. デジタルアーカイブプロセス

デジタルアーカイブという言葉が誕生してから20数年。デジタルアーカイブという言葉とともに、デジタルアーカイブ自体も一般的に浸透しつつある現在、あらゆる文化資源がデジタルアーカイブとして保存・提供されるようになった。かつて琉球王国という国家が築かれていた沖縄県には、他府県にはない独自の伝統文化があった。しかし、第二次世界大戦時には沖縄戦という日本で唯一の地上戦が繰り広げられ、多くの文化資源が戦火に消えた。そのために、近年、戦火を逃れた文化資源をはじめとした沖縄関係のデジタルアーカイブも多く作成されるようになった。主要なデジタルアーカイブとしては、沖縄県立図書館作成の「貴重資料デジタル書庫」や、琉球大学附属図書館作成の「琉球・沖縄関係貴重資料デジタルアーカイブ」がある。これらのデジタルアーカイブは、県や国に属する機関が作成していることもあり、比較的継続的な運用ができているデジタルアーカイブで



図1 「Wonder 沖縄」Webコンテンツ



図 2 「Wonder 沖縄」DVD

ある。しかし、県や国レベルはでない機関によって作成された沖縄関係デジタルアーカイブも数多く存在する。

人文系データベース協議会が運営している「人文系データベース構築事例のポータルサイト・データベース」より DB 名称欄に「沖縄」と入力して検索すると「82 件」ものデータベースにヒットする。しかし、その中から「インターネットから利用できたが公開を停止してい

る」という項目で絞り込むと「16 件」のデータベースがヒットし、運用停止になっているデータベースが多数存在し有用なデジタルアーカイブが継続的に運用できていない状況が分かる(2017 年 12 月 16 日現在)。運用停止に至る理由はさまざまだろうが、持続可能な運用にはデジタルアーカイブのアーカイブプロセスが重要になると考えられる。

従来デジタルアーカイブの開発研究は多くなされてきたが、デジタルアーカイブの継続的運用に関する研究はあまりなされていない。デジタルアーカイブの継続的運用を行うためには、消滅したデジタルアーカイブのアーカイブプロセスを検証しその過程における問題点を明らかにする必要がある。

2. 沖縄デジタルアーカイブ整備事業「Wonder 沖縄」

「Wonder 沖縄」は、内閣府が交付する沖縄新産業創出対策事業推進費補助金により、沖縄が有する豊かで魅力ある風土、文化遺産等の情報をデジタル保存しインターネット等により情報配信を行うという趣旨のもと、平成 14 年度沖縄デジタルアーカイブ整備事業によって制作されたものである。「沖縄の歴史、自然、美術工芸、芸能、民俗等に関する、日英 2 カ国語対応、総 Web ページ数 1 万ページ以上、高精細デジタル映像 10 時間以上のコンテンツにより構成されており、我が国最大の地域デジタルアーカイブ」であった。

(整備費用は、国庫からの補助金 10 億円を含む 15 億 5369 万 3000 円をかけて作成したデジタルアーカイブである(県は 3 分の 1 負担)。)

「Wonder 沖縄」の開発事業はコンテンツ制作事業とコンテンツ提供(発信)事業に大別することができ、コンテンツ制作事業においては、沖縄の持つ様々な文化資産等の映像や写真、音声、文字情報などをデジタル化しアーカイブしている。

また、コンテンツ提供事業においては、これらの情報をインターネットによる発信、および高精細の大型映像として公開するものとしている。「沖縄デジタルアーカイブ整備事業のねらいのひとつは、沖縄の持つ多くの分野における情報を文化資産として保存し、次世代に継承しようとするもの」とある。「デジタル化してアーカイブ」「文化資産として保存し、次世代に継承」とあることから、デジタルアーカイブ本来の姿をうかがい知ることができる。沖縄デジタルアーカイブ整備事業の詳細な制作内容は次の通りである。

①エレメントコンテンツ

沖縄に関する情報をそれぞれ歴史、文化、民俗、自然等大別したものや、今の沖縄の魅力を存分に伝えるような Web 用コンテンツ、DVD 用コンテンツを制作する。

②大規模展示用コンテンツ

世界遺産、沖縄の自然、「海底遺跡」等、観光の宣伝を主目的とし、超大型画面での上映を主とした実写主体のコンテンツを制作する。

③システムアプリケーション(インターフェイスコンテンツ)

システムアプリケーション(インターフェイスコンテンツ)は、世界最先端のインターフェイス・デザイン技術を駆使し、沖縄の歴史、文化、民俗、自然等を体系的・印象的な表現等、複数のインターフェイスによるアーカイブを構築する。

以上より、沖縄デジタルアーカイブ整備事業は Web コンテンツだけでなく、DVD コンテンツ・上映用コンテンツ等が制作され、デジタルアーカイブの枠を超えた総合的な事業であることが分かる。

「Wonder 沖縄」における Web 用コンテンツと DVD 用コンテンツはともに、6 分類 25 タイトルとなっている。DVD は動画だけでなく静止画やデータベースが収録されているものもある。この事業は「公募により、採択された企業コンソーシアムの参加によって進めてきた」とあるように、タイトルごとに制作企業(幹事企業)が異なる。

大規模展示用コンテンツは、世界遺産・沖縄の自然・海底遺跡などの内容に分かれ各 15 分程度の上映時間となっている。前述の制作内容にもあるように「観光の宣伝を主目的」として制作され、「Wonder 沖縄」の運用が開始された 2003 年 6 月から 7 月には、沖縄県内有数の観光地である北谷町で毎週末上映されている。沖縄県内だけでなく、東京都内の沖縄観光フェアでも沖縄の魅力を伝えるツールとして使用されている。

「Wonder 沖縄」の魅力の一つとなっていたのが、システムアプリケーション部門にて開発されたコンテンツやシステムである。「エントランスコンテンツ」「観光文化情報コミュニティ生成システム」「アーカイブ情報マネジメントシステム」「全体システム統合型情報可視化システム」これら 4 つのシステム開発により、「利用者が直感的に操作」できるようにし、コンテンツ全体の全体像とアクセス状況をダイナミックに表現する情報可視化システム「琉球 ALIVE」は、「2003 デジタルアート大賞展」にてデジタル部門大賞を受賞している。

このように当時の技術を駆使して制作された「Wonder 沖縄」は、「月間アクセス数が 60 万件を超えるなど、他のデジタルアーカイブと比べ飛びぬけてアクセス件数が多く、地域映像アーカイブのお手本的な存在」となっていた。しかし、Web 用コンテンツによる配信は平成 22 年度末（2010 年 3 月末）をもって終了している。

3. Wonder 沖縄におけるデジタルアーカイブプロセス

従来のデジタルアーカイブについて北本朝展氏(国立情報学研究所)は次のように述べている。

従来のデジタルアーカイブでは、実空間存在する貴重な「モノ」をカメラやスキャナでデジタル化する、あるいは実物の本に書かれた文字などをマークアップして電子テキスト化するという「エンコーディング」が主な目的としてとらえられる傾向があったため、それがおおむね達成できた公開時点が完成と意



図 3 「Wonder 沖縄」制作実施計画

識される傾向が強かった。

川上一貴氏(佐渡市役所)らの調査(Web 上の地域映像アーカイブの調査と検証: デジタルアーカイブズの持続性に着目して。 情報知識学会誌。 2011、vol.21.No.2)においても、「当初から完成品とみなすものを提供する姿勢がある団体がある」と述べられているように、更新を前提とせず公開時点で完成とみなしているデジタルアーカイブは多く存在する。

「Wonder 沖縄」における制作実施計画は図 3、事業沿革は図 4 の通りである。この 2 つの図は、「Wonder 沖縄」におけるデジタルアーカイブ構築のプロセスを表していると考えられる。事業沿革(図 4)の最後が「成果物納品」となっていることから、「Wonder 沖縄」においても成果物納品の時点で完成とみなされ提供されていたのではないかと考えられる。



図 4 「Wonder 沖縄」事業沿革

「単年度の大型事業」という記述からも、デジタルアーカイブ構築において当初より完成後の更新については計画されていなかったのではないか。「一定の質の維持を危ぐする声」とあるが沖縄県担当課の回答にもあったが「配信システムの維持管理に多額の予算が必要」という想定がうまくなされていなかつたのではないかと考えられる。事実、平成14年3月11日に行われた沖縄県議会予算特別委員会において、金城昌勝委員の「維持管理費、あるいは運営費等は毎年幾らぐらいかかるか」という質問に対し、儀間朝昭情報政策室長は「具体的な運営管理についてはこれから試算していくところであり、建物等ではないので、コンテンツの更新等の維持管理は、我々としてもできるだけ運営費がかからないような形での事業を進めたいと考えている」という主旨の回答を行っている。

4. Wonder 沖縄におけるデジタルアーカイブプロセスの問題点

上記制作実施計画と事業沿革を元に「Wonder 沖縄」におけるアーカイブプロセスを図5にあらわした。「沖縄の持つ多くの分野における情報を文化資産として保存し、次世代に継承しようとする」ことがねらいのひとつであった「Wonder 沖縄」だが、アーカイブプロセスでは「長期保存・継承」のプロセスが見られない。

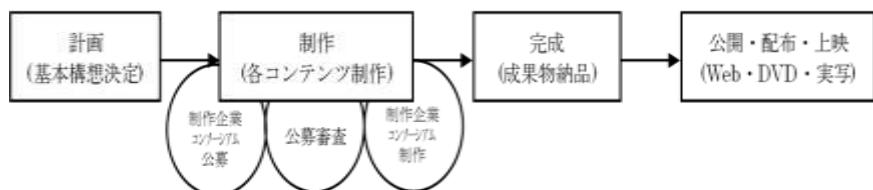


図5 「Wonder 沖縄」におけるアーカイブプロセス

以上より、本事業は「沖縄デジタルアーカイブ整備事業」と名がついてはいるものの、長期保存することが目的ではなく、コンテンツを完成させ公開・配布・上映することが目的となっていることが分かる。このアーカイブプロセスが、「Wonder 沖縄」の原資料が消滅した原因になったと考える。

【研究課題】

「Wonder 沖縄」のアーカイブプロセスでは何が足りなかつたのか。

どうすれば持続可能になつたのかを考えなさい。

【参考文献】

- (1) 富川晶世著：デジタルアーカイブにおける知の増殖型サイクルの実証的研究 平成29年岐阜女子大学修士論文（主査：久世均）